ゆく河の舟で三三九度

深森　花苑

第一話

　淡い光の中ではらはらと桃色の雨が降っていた。桜の花と花の間を縫い、ささやきのような風が渡っていく。そして桜の枝を揺らす風は、うららとまどろむ人々の呼気を川面の高い空に運んでいった。
　桜の花の蜜を吸っていたヒヨドリが飛び立っていった。あっという間に高いところまで羽ばたいて、青空の小さな黒い染みとなってしまった。後にはなんの音もしない。雲の流れが空を覆うくらいだ。
　川のほとりには花のもたらす春の芳香が満ち満ちていた。桜並木の華やいだ雰囲気とはうってかわって、川は静かに流れ続けている。そしてその川の上を、シジミチョウがいつまでも土に腰を落ち着けない桜吹雪のごとく舞い続けていた。
　シジミチョウの背景には、背の低い雑草の緑や丸みを帯びた石ばかりの、よくある河原の風景が広がっているはずだった。しかし、そこはいつもと様相が違っていた――人が川に向かって、一列に並んでいたのだ。その上お互いに手を握り合って。そして河岸にそうやって並んでいたのは、どれも還暦は過ぎているであろう老人ばかりだった。
　老人たちが並んでいるのは岸の一方だけではなかった。川を挟んだもう一方の岸にも、やはり同じように手を繋いだ老人たちが一列に並んでいた。しかも、片方の岸には男性しかおらず、その反対の岸には女性だけだった。
　お互いに向き合って、静かに、軽やかに、両者の間をただ川のせせらぐ音だけが流れている。
　川べりに並んだ老婦人たちは、決意をもったまなざしで、まっすぐ、同じように対岸に並んでいる老紳士たちを見つめた。そして両の手に繋がれた隣り合う者の手を、一層強く握り締めた。手の皺が重なると、弱々しく見えたそれから力強い息吹が零れ落ちた。
　列から少し離れたところで一人で立っていた、全身黒のスーツに身を固めた金縁眼鏡の堅物そうな若い男が拡声器を構えた。
「それでは、始めてください！」
　拡声器を通した割れた男の声が河川一帯に響いた。一斉に、老人たちは大きく息を吸い込んだ。
『咲いて嬉しいはないちもんめ！』
『あげて嬉しいはないちもんめ！』
　突然、老人たちははないちもんめを口ずさむと、彼岸の老人たちに迫りながら片足を川のほうへと蹴り出した。
　かけ声が両岸で一巡すると男性ばかりが並ぶ列の方から、一人の老人が身を拘束する鎖を引きちぎりでもするかのような勢いで前に出た。周囲の人間もこの老人に連られて、列は大きな「く」の字型に歪んだ。前に出た老人は猛々しい獣のように、力の限り上半身を前へ前へと出すと、唾を飛ばさんばかりの勢いで叫んだ。
「フサちゃんが欲しい！」
　それと時同じくして、対岸の女性列からも一人の老婦人が周りよりも一歩前へ出ていた。小さ

な身体を屈め、ありったけの力を込めて叫んだ。
「ケンちゃんが欲しい！」
　空高く、ヒバリが鳴いた。誰もが息をのみ、緊張のあまり手に力を込めた。早鐘を打っているはずの心臓の鼓動さえ、高く跳ね上がった球が落下する速度で聞こえた。
　コンマ一秒が流れる長い時間が経った後に。
「おめでとうございます！　カップル成立です！」
　拡声器が叫んだ。
　人々はお互いの顔を見合わせると、快哉を叫びながら抱き締め合った。手を叩いた。辺りの音はかき消されてしまった。どこからかやってきたチンドン屋は喜び勇んだ老人に当たり鉦を奪われた。しかし、その分太鼓をいつもより多く鳴らすことで、この場の祝祭ムードを全面的に肯定した。やった、やった、と繰り返しながら跳ね回る老婦人たちの髪は女学生のお下げのようにつややかに輝き出し、やがて本物の女学生となってしまった。
　化けていた狸は本来の姿に戻って腹鼓を打ち出し、はしゃぎすぎて水面を走り出すかなづちの男もいた。ある一匹の虻だけは、この喧噪を免れた野原の片隅でたんぽぽと口づけを交わしていた。馬鹿騒ぎをちらりと見遣ると、また情事の続きへと耽っていく。
　青い空に花火の白い光が散った。次から次へと舞い上がり、二人に捧げられる大きな花束となっていく。
　お祭り騒ぎのごったがえしの人混みの中でケンちゃん——和佐井健二——とフサちゃん——窪池房子は、そこに川の隔たりがあるのも忘れて見つめ合っていた。二人は終始微笑んでいた。互いの笑顔を見ると、余計に笑顔が溢れてしまうのだ。
　川面を飛び続けていたシジミチョウが健二の手に止まった。健二はシジミチョウを送り逃がすように、対岸の房子のほうへと手を伸ばした。すると、シジミチョウはひらひらと飛び立ち、房子の頭に止まった。まるで健二から送られた髪飾りのようだった。
　房子が小首を傾げると、シジミチョウは二人の間に結び切りの放物線を描くと高いほうへ飛んでいった。
　ひらひらと、銀の糸は太陽の光に解かれてやがてどこにも見えなくなった。

　＊

「して、お見合いは無事成立しましたので、」
全身黒いスーツに身を包んだ笹岡は必要な書類を封筒の中に入れると、緊張した声持ちで、
「おめでとうございます」
と一息に言うと、賞状でも授与するようなかたちで封筒を健二に手渡した。健二も、右手、続いて左手、と順々に封筒に手をかけて受け取ると、おでこのところにちょん、と封筒をつけてにんまりと笑った。
　健二の隣には、窪池房子が座布団の上で陶器の置物のようにちんまりと鎮座していた。もう何十年もそうやって健二の隣りに添い遂げていたかのように、房子が健二のそばにいる様子は早く

もなじんでいた。
　笹岡は、和佐井の顔を見て、窪池の顔を見て、口角だけを上げ白い歯を見せた。いや、笹岡本人としては、これは歯を見せたのではなく、笑ったつもりなのであった。しかし、その笑みは、機械を思わせる不自然な笑みだった。笹岡の細い金縁の眼鏡は笑みがもたらした息によって曇り、笹岡をより一層人の血の通っていない不気味な人物に仕立て上げていた。
　ここまで笹岡の笑顔が不自然になるのも無理もない。彼はついこの間まで笑うことを許されない職についていたのだから。
　健二と房子はそんな笹岡の不気味さなど意に介すこともなく（単に見ていなかっただけなのだが）健二が手にした封筒を二人の間に授けられた第一子でもあるかのようにをみつめていた。実際には、二人の間に子供がこれから授けられることはない。しかし、それが二人の絆を弱める理由になどならないことは、この様子からも明白なことだった。
　これから始まる生活のすべてを、二人は生まれたばかりの雛鳥のように感じるだろう。昨日まで、何十年も歩き慣れてきた駅までの道のりも、押し入れから布団を出して明かりを消す瞬間も。
　二人の様子は、降り止まないライスシャワーのなかで純白のウエディングドレス姿の花嫁と腕を絡ませられた新郎が感じている満ち足りた想いとなんら変わりなかった。
　「新しい封筒ですね」
　封筒の印字面を見て健二がぽそりとつぶやいた。まだ印刷してからひと月も経っていない封筒の金文字の社名がぴかぴか光っている。笹岡が一瞬、ぎくりとした表情を見せた。しかし、すかさず
「今月仕入れたばかりの初物ですから」
と言うと、こんどはあの不自然な笑みからは想像できない、典型的な笑顔を見せた。
　笹岡の様子には気付かず、健二は立ち上がると、では行きましょうか、と房子を促した。房子は眼を細めて頷くと、着物を着ているときのようなしなやかな動作で立ち上がった。

　建物の外へ出ると、多摩川堤防沿いに咲く桜並木がちょうど見頃を迎えていた。
「満開ですなぁ！　せっかくだからちょっと桜の下を歩きましょうか。それで、疲れたらバスに乗りましょう」
　健二が提案すると、房子もうなずいてしたがった。
　堤防への階段を上るときに、健二は「房子さん」と言って左手を差し出した。房子は健二の顔をちょっと見てから、少し照れた様子でまばたきをするとその手の上に自分の右手を重ねた。か細い手からは、思っていたよりも高い体温が伝わってきた。房子は、今度は少し神妙な顔つきになって、うっかり転んでしまったりしないように、自分の足下を見つめながら歩んだ。
　階段を上りきると、左には多摩川の河川敷、右には長く桜並木が続く光景が目に飛び込んできた。土手の青草と桜のピンク、そして青い空のコントラストが映えている。花見客も多く、舗装された道を一歩出るとレジャーシートが桜の根元に所狭しと広げられていた。
　健二はふいに何かを思い出して、ふふ、と笑った。

「『お見合いの日』って知ってます？」
「そんな日があるんですか？」
「ええ、十一月六日に。由来はね、この多摩川で戦後初めての集団お見合いをしたのが十一月六日だったからだそうですよ」
「まぁ、川沿いで」
　健二はうなずいて続けた。
「きっと、この結婚相談所が多摩川沿いだったからでしょうね。…昨日、夢を見たんですよ。ちょうどこういう桜の咲く、川の側で」
　房子は驚いた様子で健二を見た。
「本当に？　私も見たのよ！　昨日、桜並木の咲く川沿いの夢。そう、川のところに老人ばっかりが一列にこう並んでて、歌いながら…」
「ああーっ、房子さん！」
　房子が夢の内容を話そうとすると、健二は慌てた様子で叫ぶと、顔の前に人差し指を立てて「しーっ」とやった。
「夢は人に話すと、本当にはならなくなると言いますから」
　健二はそう言うと、また前を向き歩き始めた。自分の口の中で独り言でも言うように、健二は続けた。
「私も、見たのはきっと同じ夢だったと思っていますよ。だからこの先は、私も内緒です」

　＊

　笹岡は盆の上に二人に出した湯飲み茶碗を乗せた。一人残った相談所の室内で、その音はびっくりする程大きく響いた。給湯室に運び、水を流す。磨りガラス越しに入る北向きの静かな光が笹岡の頬を照らした。
　湯が沸くと、笹岡は自分のための茶を煎れた。
　湯飲み茶碗片手にカルテを取り出してぺらぺらめくる。ーー和佐井健二。健二の項が出てきた。履歴書のように写真が紙面の左肩に貼られ、履歴書のようにプロフィールが続く。

　和佐井　健二（わさい・けんじ）
　１９３ｘ年１０月ｘｘ日生　７２歳　男
　結婚歴　１回　離婚の理由ーー

　笹岡は意図的に視線をずらした。出した煎餅を囓って飲み込み、茶で更に流し込んだ。
　続く健二の生い立ちに目を移す。
　１９３ｘ年１０月、健二は東京の府中で生を授かった。その数年後、太平洋戦争が勃発し、健二は戦時下で幼少期を過ごすことになる。

１９４５年０８月　終戦

終戦直後のことは、健二はあまり話したがらなかった。父の戦死、残された母とどうやって生きていくか。まだ幼い健二にはどうすることもできないことがあまりに多かった。

１９５ｘ年０４月　中学卒業

この頃、健二は中野へと引っ越している。母が再婚したのだ。経済力のある新しい父の下、健二は高校へと進学するが、新しい父との折り合いはうまくいかず、高校を卒業するとすぐに家を出て就職。高田馬場の学生街付近に住まいをただし、デパートのレストランで働き始める。
笹岡はそこで一度息をつき、手を止めた。老人専用の結婚相談所として開いたこの場所だったが、自分の何倍もの時間を既に生きた人々の身の上を聞くのはなかなか労力のいる作業だった。そして、その話を元に誰を紹介するか候補を出す。現在だけを見て決めればいいのではない。右へ左へ、蛇行していった人生の、全体の有り様を見て決めるのだ。
自分の選択は本当に最善だっただろうか。しかし、そう信じるしかないのだ。それは笹岡がこの職に就く以前に、嫌と言うほど身につまされたことだった。
笹岡は、記された過去にメスを入れるようにページをめくった。

１９６ｘ年０５月　美千代と結婚

働き始めてから六年の月日が経った頃、健二は同じレストランでウェイトレスとして働いていた美千代と結婚する。健二、二四歳のときだった。
美千代との結婚のポイントは何だったか。カルテには「顔」、「おしとやかな振る舞い」、「闊達な言動」と記されていた。笹岡は、それを語っていたときのやけに朗々と話す健二の様子を思い出してふ、と笑った。

１９７ｘ年０９月　「洋食レストラン　わさい」開店

時代は高度成長期の波が押し寄せていた。美千代との間に二子を授かった健二は、デパートのレストランを辞め、独立開業することを決意する。生まれ故郷の府中に開いた「洋食レストラン　わさい」の経営は順調で、近辺に三つの支店を開くほどになる。
しかし、健二の挑戦はとどまるところを知らなかった。その後、「洋食レストラン　わさい」はさらに店舗数を増やしていった。エリアも拡大し、都内に一〇店舗を構えるようになる――。
笹岡は突然ぱたりとカルテを閉じた。手元の茶を流し込む。口の広い湯飲みは冷めやすく、もう温くなっていた。

＊

健二と房子の二人は川面を見渡せるベンチに座り、その流れゆく水の調べを聞いていた。
やや西に傾いた日はせせらぎをまばゆい銀の屑に変えていた。
「川は、一方にしか流れないんですね」
健二は一言一言含めるようにそう言った。房子は、少し心配そうな顔で健二を見た。
「いや、すみません。少し昔のことを思っただけです」
健二は房子の様子に気付き、そう続けた。二人の間に、沈黙が訪れた。言葉にしないだけで、健二の思考は続いていた。それがもたらす空白の時間だった。
「房子さんと、初めて出会った日のことを考えていたんですよ」
「嘘ばっかり」

＊

笹岡は再びカルテをパラパラとめくり、房子の項を出した。

窪池　房子（くぼち・ふさこ）
１９４ｘ年０６月ｘｘ日生　６５歳　女
結婚歴　1回　離婚の理由　夫からの暴力、浮気

この冒頭から、笹岡はため息を漏らした。房子の人生の中盤は波乱に満ちていた。大きな台風が房子の人生を襲い、洗いざらい持って行ってしまった。

１９４ｘ年０６月――戦後のベビーブームの真っ直中に房子は生まれる。学芸大学の脇に住む大地主の娘だった房子は、何の不自由もすることなく成長する。そして、親の持ち込んだ縁談を承諾する。

１９６ｘ年０８月　結婚

ここから、房子の長い長い嵐が始まる。その嵐がようやく去り、房子の人生に再び光が射すのは、房子が壮年にさしかかる１９８０年代に入ってからのことだった。
房子はその頃、得意の洋裁で生計を立てていた。なかでも衣服の修繕は「跡が分からない」と近所でも大層評判だった。大事な服のお直しは房子の所へ。新聞の取材が来ることもあったが、房子はそれを頑として拒み続けた。

＊

「私はね、前の夫と川に来たときのことを思い出してました」

房子の目は遠くを見つめていた。
「川なんか見ないで、歩くばっかりの人だった」
また二人の間に沈黙が流れた。
「じゃあ、もうちょっと見ていましょう」
健二は房子に微笑んだ。
「時間はいくらでもありますから」
房子は吹き出した。
「こんなによぼよぼになりかけの、じじいとばばあなのに？」

＊

笹岡は祈るように天井を見上げた。
どうかどうかどうか。
神様というものを、笹岡は信じたことがなかった。頼る、ということが嫌いだったのだ。よくわからないなにかに祈るくらいなら、自分を拝み倒したほうがいい。それが笹岡の信念だった。
しかし、今回ばかりは祈らずにはいられなかった。そうか、祈るとは、自分の手の届かない何者かの為に捧げるものだったのか。そんなことに笹岡は今さら思い当たりもした。
笹岡がこうまで思うのは、健二と房子がいまこのカルテの束のなかで一番始めに送り出したカップルだったからであろうか。それとも、健二と房子が抱えるある境遇のせいであろうか。
どちらかはわからない。
笹岡は、自分の身を流れるまだ慣れない柔らかな感情に戸惑っていた。

（第二話へ）

第二話

　でもよく考えてみればわかる。真のヒーローは一体どんな顔をしているか。何度邪魔をされたって諦めずに立ち上がって、自分の夢を追い続けて、信じた道をまっすぐ歩む。こんな強い心を持ってるのはヒーローのほうじゃない。ヒーローにやっつけられる悪役のほうだ。
　だから私は辛くなったら、あいつらの顔を思い出す。あいつらがこてんぱんにのされて、それでも次の週になったら先週と同じ戯れ言を口にするさまを。どんなに「特別な力」なんてなくても、明日また起き上がっていいんだって思うために。
　おやつ　冷凍みかん、マシュマロ、パイの実、まるごとバナナ
　いいこと　戸越せんせいよりおみやげ・フルーツ大福×２個もらう

４月７日

　今日は幼稚園の入園式だった。うちの幼稚園は、入園式でもお祭りみたいににぎやかにはならない。それでも人がいなくなると、いつもよりからっぽになった。園庭の桜はもう少しで満開だ。
　隣のゴミ屋敷のゴミ撤去はどうやら昨日が最終日だったらしい。昨日までは業者がゴミ屋敷を出入りして、消毒らしいスプレーをしていた。そのとき既に、庭に積まれて幼稚園のほうまで悪臭を漂わせていたゴミ袋やその間に挟まったガラクタは運び出されていたみたいで、一つも残っていなかった。昨日、入園式の準備で出勤したら、こうなっていた。春休みの間にここの住人に何があったのだろう。
　しばらくすると、ゴミ屋敷から掃除機をかける音が聞こえてきた。あの住人が掃除機をかけるなんて信じられない。…もしかして、亡くなったとか？　私がそんなことまで思い始めたとき、掃除機の音が止んで中から住人が出てきて慌てた。
　横目でチラ見した限りでは、いつもフェンス越しにゾンビみたいな顔で幼稚園のほうを見ていたあの人物のようだった。ただ、無精ひげは剃られ、染みだらけだったズボンとシャツは新しい物になり、そしてなにより眼が、生きた人の眼になっていて、まるで別人のようだった。
　春はきらいだ。なにもかも別の新しいものに生まれ変わってしまう。
　職員室に戻っても、胸の中を煙が巻いていた。この気持ちを言ってもこいつどうしたんだろ、って顔されるだけだろうしな。そう思いながら昨日もらった大福を食べたけど甘いだけだった。苺のほうが定番だけどおいしい気がする。

　おやつ　ポテチ、雪見だいふく、ブランデーケーキ、ヨーグルトムース
　いいこと　コスメデコルテの限定キットのＤＭが届く

４月８日

入園式から一日。隣のクラスで、新しい園児たちのなかに泣いたりぐずったりする子もなく、平和な一日だった。
春になって一番良かったのは、園庭に出てもあの家から悪臭が漂ってこなくなったことだ。もう倉庫に行くたびに「これからこの臭いもっと酷くなるんだよな」と身構えなくていい。
確か１０時過ぎぐらいだったと思う。ゴミ屋敷の引き戸がぴしゃんと鳴って、中からあの住人が出てきた。幼稚園の裏の道路を背筋を伸ばして通っていく。格好は、薄手の明るい茶系のセーターにクリーニングから出してきたばかりと思われるグレーのスラックス。まだ朝晩は寒くなるだろうに、ジャケットは羽織っていなかった。
私は胸騒ぎがした。「これから何かが起きるんじゃないか」って。この幼稚園に勤めてもう４年経つけど、その前からずっと、あのゴミ屋敷はゴミ屋敷だった。それがなんだ。冬から春になる間に、こんなに一変してしまう、なんてことあるのか？
だから私は、これからこの隣人のことを日記に書き留めていくことにする。事細かなところまで。
私は、目撃者になるのかもしれない。

４月９日

またあの隣人は外に出ていった。昨日と同じ、１０時くらい。今日は紫のニットのベストに生成のシャツ、茶系のチェックのスラックス。こんなおしゃれな洋服、どこに持っていたのだろう。私は今までこの隣人のアンダーシャツ姿や年中同じ色のトレーナーばっかり見させられた。
お昼になって、今日は初めてのお弁当の日。うちは年長組だからみんないつもと変わらない様子だったけど、隣からははしゃいだ声がずっと聞こえてきた。
午後になってお昼寝の時間に入った頃、事件は起こった。１４時４０分頃。外でスーツケースをガラガラ引く音が聞こえてきて、隣人の家の前で止まった。私がトイレに行く振りをして廊下に出ると、園庭の向こうから引き戸をがらがらと開ける音が聞こえてきた。なんとなく騒がしい。私は廊下のサッシを開けて耳をすました。「どうぞどうぞ」と人を案内する隣人の声が聞こえてくる。それに続いて「おじゃします」という声。…女の人？　年齢は高そうだ。空気を入れ換えるためか、次々と家中の戸を開けているようだ。私はサンダルを突っかけて、園庭へ出た。すぐ向かいにあるあのゴミ屋敷が目の前に見えた。誰かが縁側に立って、園庭に生えている満開の桜を見上げている。私は桜の枝に見え隠れする、その奥の人物の顔を見ようとした。風が吹いて、枝が大きく揺れた。縁側に立っていたのは、６０代位の品の良さそうな初老の婦人だった。

＊

「では、房子さん。明日、１１時に迎えに来ますから」
夕焼けの紫を桜が吸い込むと、夜はすぐそこだった。二人が駅に着くと駅名の看板はすでに点

灯していた。その明かりの届かないところでは闇が服や表情の彩りを蝕もうと鎌首をもたげている。
「そして、荷物をまとめ終えたらランチをとりましょう。おいしいところ知ってるんです」
　房子は黙ってそう言う健二の顔を見つめていたが、やがて、はい、と顔を崩して言った。

　＊

「どうぞどうぞ」
　健二は引き戸を引くと、房子を先に入れさせた。「おじゃします」と房子は玄関に入った。玄関の床は黒と白の丸タイルが貼られていて、入ると少しひんやりする。
　健二は家に上がると、家中の窓を開けていった。
「最近までとても汚かったものですから、匂いがちょっと残っててね」
　健二の姿が見えなくなったので、房子も健二を手伝うことにした。水場周りの健二とは逆方面、縁側の戸を開けていく。ねじ式の鍵をくるくる回して戸を引くと、タン、と威勢のいい音がした。外からは桜の花びらが流れてくる。房子が縁側のほうに出ると、フェンスの向こうに大きな桜の木が生えているのが見えた。そして、その更に奥に、動きやすそうなジャージの上にエプロンをつけたぽっちゃり体型の女性が見え隠れしていた。驚いた顔をしてこちらをみている。
「お隣りはなんですか？　公園？」
「いえ、幼稚園ですよ。ちょっと小さめなんですけどね」
「こっちを見てる人がいますよ、ほら」
　健二はそう言われて、ちらっと縁側から外を見た。
「ああ、『鏡餅さん』か」
　健二はすぐに首を引っ込めると、湿らせた台拭きを畳んで居間のテーブルを拭き始めた。
「ちょっと体型が鏡餅みたいでしょ。それで、肌がもちっとしてて。心配ありません。真面目な、幼稚園の先生ですよ。あの幼稚園では一番先輩株なんじゃないかなぁ」
「なんでこっちを見てるのかしら？」
「なんでしょうねぇ。なんだか春の始業からすごい形相で私も見られているんですよ」

　＊

　房子が居間を立った。台所のほうへ立ったので、健二はお茶をいれるのだろう、と思っていた。戸棚を開く音が聞こえていたと思うと、水道から水を溜める音に変わった。しかし、勝手口の扉が開く音が聞こえ、やがて房子は縁側のほうに回ってきた。
　一体何をしているのかと健二が縁側から庭をのぞくと、房子は幼稚園のフェンス寄りの一角にじょうろで水をやっていた。
　ごみで埋まっていた庭だ。植木なんて何も残っていないと思っていたのに。
　光を受けて、じょうろからの水は光の雨のように見える。健二はじょうろを傾ける房子の細い

肘を見ていた。腕まくりをしているので、グレーのカーディガンの下に着ていた白いブラウスが表に出ている。房子がゆらゆら揺れると、房子の足下にオレンジのポピーが茎を伸ばしているのがちらちら見えた。
　健二は微笑みながら立ち上がった。台所に行き、焦げだらけのやかんに水を入れる。火をつけて手持ちぶさたになった健二は、居間の奥にあるタンスの一番上段の小さな引き出しを見ていた。様々な感情が胸を行ったり来たりしたが、引き出しのほうに近づくことはしなかった。そのままぼんやりしていると、勝手口から房子が戻ってきた。子供のような顔で「ただいま」と言う。

　＊

「明日はどこに行きましょうか」
　夕飯のときに、健二は口を開いた。
「どこって？」
　房子はきょとんとしている。
「せっかく結婚したんだし、デートしましょうよ。私たちはもう仕事もないし、家にずっと籠もりっきりじゃつまらないでしょう」
　房子はまだちょっと戸惑っていた。それを隠すために、大根の煮物に箸を伸ばす。健二は少しトーンダウンして、今度は優しい口調で言った。
「どこか行きたい場所はないですか？　今まで行きたいと思っていたけれど行けなかったところとか」
　房子は少しううん、とうなって考えていた。健二がその間に何か言わないか、と待っていたが、健二がにこにこ笑ったまま、箸も動かさない様子なので、房子は恥ずかしそうに首を傾げながら言った。
「子供みたいな場所でもいい？」
「いいですよ、行きましょう」
「私ね、パンダを見てみたいの」

　＊

　上野動物園にパンダがやってきたのは１９７２年、カンカンとランランが初めだった。中国で「幻の動物」として国宝扱いされているパンダを、日中国交正常化の記念として中国が日本にプレゼントしたのだ。カンカンとランランを一目見たさに撤夜で並ぶ者が出たり、連日８００人以上の列ができたりと当時はパンダが大ブームになった。当時、パンダを見ることは大人気のアトラクションに乗るのと同じくらい大変なことだった。
　健二が空を見上げると、青い空に電線が縦に伸び、その遙か上を雲が流れていた。行楽日和だった。

「まるで生まれ変わったみたい」
　独り言ぐらいの小さな声で房子は言った。
「昨日の夜、眠るまでの間、私ずっと考えてたんですよ」
　房子は密かにはしゃいでいるようで、昨日よりも歩く速度がこころなし速い。
「誰かに新しく出会うことは、生まれ変わることのようなんですね」
　山手線に乗る。たたん、たたん、と鼓動のような穏やかなリズムが二人を動物園へと連れて行く。房子は少しだけ眼を閉じた。
　扉の側につけたベビーカーの上で赤ん坊がガラガラを振っている。カラリン、カラリン。鈴の音が房子の夢の中に降ってきた。

　＊

　手を伸ばして布のボールを、床に座った赤子が受け取る。子供がボールを振ると、カラリン、カラリンと音がした。
「この子がもう少し大きくなったら、動物園にも連れて行きたいですね。ほら、このまえ上野動物園にパンダがやってきたでしょう」
「…馬鹿馬鹿しい。パンダなど中国の動物だろ。そんなものを見るために三時間も四時間も待つのか」
　房子は黙った。黙って、そのまま黙っていようかとも考えた。結婚して４年、房子が身に付けた知恵だった。しかし、そのときは言葉が口をついて出た。
「…もう、そうやって『どこの国のものだから』ってなんでもかんでも否定する時代は終わったのよ」
「口答えするな！」
　房子は眼を固く閉じた。頬を打つ鋭い音がした。歯を食いしばったが、口の中にはみるまに血の味が広がっていた。
「房子さん、降りますよ。上野です」
　まぶたの裏の闇のなか、誰かが肩を揺すっている。

　＊

「上野に着きましたよ。さあ、降りましょう」
　房子が目を開くと、そこには光が溢れて滲んでいた。笑顔の親子や若い恋人たちがあれこれしゃべりながら扉のほうへ流れていく。

　＊

「いやあ、くたびれましたね」

　やっとみつけた空いたベンチは、すぐ裏で遊具の塗装補修をやっていてシンナー臭かったが、健二は気にせずベンチの背にもたれかかった。買ってきた桜木亭のパンダ焼を口にひとつ運ぶ。
　赤い背景にパンダのイラストが印刷されたパッケージは、おそらく７０年代のパンダブームのときから変わらないデザインなのだろう。笑いかける人形焼きのパンダはへその部分に桜の花、背中に「桜木亭」の刻印がされている。房子は人形焼きをひっくり返したりしながら神妙な顔で見ていた。
「これ、雑誌で見てたわ。ずいぶん昔だったけど」
「それじゃあよかったですね。憧れに一つ手が届いたんですな」
　健二の口調は、その功績のすべてが自分が関わったおかげだ、とでも言いたげだった。そのときパンダ舎の中で見た、ベビーカーを引いていた親子が目の前を通り過ぎた。パンダ焼の機械の前で立ち止まっている。ベビーカーの子供を父親が抱き上げて、子供にパンダ焼がジェットコースターのようなレールに乗った鋳型からコロコロできあがっていくさまを見せている。房子はちょっと健二に意地悪したくなった。
「でもね、私たちは今こんな歳になってから初めて食べてるじゃないですか。そうじゃなくてね、私たちももう何十年も連れ添った夫婦で、これももう何度も食べているのだったら、また違ったと思うのよ。『房子さん、時代が変わってもこうして同じものが食べられるのは嬉しいですな』って昔を懐かしみながら食べられたら、もっと良かったって思うのよ」
　健二はちょっと困った顔をするだろうか。そう思いながら房子が横を見ると、健二はけろっとした様子だった。そして、表情を変えずにこう言った。
「それなら、そういうことにしちゃいましょうよ。私たちは、もう何十年も連れ添った夫婦で、今日は上野動物園に久しぶりにやってきた。子育ても仕事も一段落して、後は二人きりの静かな生活を送るのみ。変わらないパンダ焼の味に、昔を懐かしんでいるのだ」
　最後のほうは、まるで小説の一節を朗読しているように健二はしゃべった。今度は健二が房子をしたり顔で見る番だった。
　房子は、あまりに驚いて一瞬言葉を失った。そして、想像もしなかったこの答えに、笑いが込み上げてきた。
「そうね、そう考えてしまえばいいわね」
　大きな声で笑っているうちに、腹の底のほうが暖かくなってきた。そうか、そんなことでよかったのだ。笑っているうちに、もつれた糸がほぐれていくのを感じた。こんな簡単なことだったんだ。何を何十年も悩んでいたのだろう。
　このときの健二は、ほんの言葉のあやで言ったにすぎなかった。また、房子もそれでいいと感じていた。
　思い出したくもない過去は、薄墨の底で揺らぐ絵の具の色のようにぼんやりとしている。もしもその過去に、現在を上から流し入れたら…。
　ガシャン、と背後で音がして、小さな悲鳴があがった。健二たちが振り返ると塗装屋がペンキの缶を落としてしまい、中の赤いペンキがアスファルトに流れていた。アスファルトに描かれていたパンダのイラストが見る間に赤いペンキに呑まれていく。

あーあ、と健二は声を出した。
「あれじゃ、もう下に何が描いてあったんだかわからないよ」

（第三話へ）

第三話

　房子はひとり、健二よりも早く目が覚めると朝の暗がりを這い出て台所へ立った。流しではすでに炊飯器が一合の白飯を炊き終えて、房子を待ち構えていた。ふっくらとした白い香りが、腕を伸ばし、その両の手を広げて包み込む。房子は香りの抱擁を軽くいなすと、慣れない手つきで戸棚を開いた。ぽつりと置かれた古い鍋はいつも沸かす湯の量が鈍色になって刻まれている。房子は鍋を流しに出して、慣れた手つきで蛇口をひねった。
　どの家にも訪れるなにかが始まる騒がしい気配はまだここには来ていなかった。しゃん、とした朝の光が空気の皺を伸ばす。湯が沸く前の、炎の燃焼する静かな唸りが響き続けている。
　やがて襖を隔てた奥の間から健二の大仰なあくびが聞こえてきた。居間のテレビのスイッチが入り、ニュースの平坦なアナウンスが朝のBGMとなる。まな板の上で葉が刻まれ、たんたんと流れるニュースのリズムをとる。一日を回す水車が動き始める。時の川がゆっくりと流れ始める。
「いただきます」
　手を合わせて二人は箸を手に取った。房子はそこで一度手を止めた。なにか思うところがあるのか、テレビを見るでもなく、茶碗を手の中でもてあましている。健二はぱりぱりといわせながら海苔を喉の奥に追いやると、次は鮭に箸を伸ばした。
「誰かと一緒の朝ごはんは久しぶりですか」
健二は鮭をほぐしながら聞いた。皮に付いた透明な脂身も残さず箸で集める。ニュースは昨日と異なる個所のわからないフレーズを繰り返していた。
「いえ、半年ぶりぐらいですよ。それまでは洋品店のおばあちゃんとずっと一緒に食べてましたから」
　房子はそこで顔を上げ、白米を一口運んだ。健二は、まだ部屋の片隅に追いやられているままのスーツケースをちらりと見遣った。国内旅行用の小さなスーツケースは、今までの房子の人生のすべてすべてを詰め込むにはあまりに小さかった。しかし、房子は旧居から出る際に、これだけでいい、と言ったのだった。『もう、必要なものはこの中に全部入ってますから。』
　房子は昨日、その中から寝間着だけを出すと、またチャックを端っこまで丁寧に閉めていた。
「荷物…本当にあれだけで良かったのですか？　あの洋品店は、ゆくゆくは取り壊しになるのでしょう？」
　房子は四〇代から「椎野洋品店」という町の小さな洋品店で住み込みで働いていたという。房子はその洋品店の主である椎野トヨという老女と二人で衣食を共にして暮らしていたのだ。しかし、今はそのトヨもこの世を去り、また、房子も健二の元へ行くことになり、椎野洋品店は住む者のない廃墟となった。建物は近いうちに解体されるという。
　健二は何度か椎野洋品店まで房子を迎えに足を運んだことがあった。薄暗いカウンターの裏にはボタンの箱が天井近くまで積み上がり、そしてその更に上にもうページの黄ばんだ分厚い冊子が何冊か無造作に置かれていた。それは、どうやらアルバムのようだった。あれが房子の持ち込んだ荷物だったかまではわからない。ただ、ああいったものが誰の手元にも残らず、塵あくたと変わらない扱いで消えていくのは忍びない気持ちがした。誰かの、たった一度「生きてきた」と

いう痕跡ーー。
「いいんですよ」
　房子は湯気のあがる豆腐とわかめの味噌汁をすすった。
「私が残したいのは、これからの人生ですから」

　＊

　押し入れの奥からは健二のあーとかうーという声が聞こえてくる。埃だらけの桐箱、お菓子の箱、角のつぶれた段ボール箱、そしてそこからはみ出ていた髪がとっ散らかっている人形…居間の床はすでに数多のがらくたでいっぱいになっていた。
「健二さん、なにもね、昔のものを使わなきゃいけないってわけじゃないと思うのよ」
房子は何度目かしれない呼びかけを、無駄とわからずまだかける。
「最近はね、性能がいいのでなければ安いのも随分出てるのよ。そういうの買ってみたっていいと思うのよ」
　押し入れの奥からいくつかのがらくたが犠牲になったとしか思えない破壊的な音がした。そして、健二の「あった！」という叫びがした。
　健二は瓦礫から負傷者を救い出した消防隊員よろしく、手に一つの黒い物体を抱えて押し入れから颯爽と現れた。健二の手にあったのは、黒い少し大きめの化粧ポーチのような皮の入れ物だった。中央の部分にマチがあり、その部分がこんもり外にでっぱっている。健二は皮の蓋を開けて、中を取り出した。
　それは、ストロボ付きのコンパクトカメラ「コニカＣ３５ＥＦ」、いわゆる「ピッカリコニカ」だった。１９７５年に発売され、コンパクトカメラの「型」を作り上げたといっても過言ではない、カメラ史に名を刻むカメラだ。このカメラは国内初のストロボ内蔵型のカメラとして発売され、「ストロボ屋さん、ごめんなさい！」というコピーはテレビを通じて世の多くの人が知るところとなる。
　健二は息子の頭を撫でるようにカメラの機体に触れ、レンズの蓋を外した。両手で構え、房子にファインダーを向ける。房子はとまどいながら、両手を前に重ねレンズのほうを遠慮がちに見つめる。
「あれ？」
　健二はファインダーをのぞくのをやめた。シャッターボタンを何度も押す。が、下がりきらずに戻ってしまう。
「シャッターがバカになっちまった」

　＊

４月１１日

週が明けても、桜はまだ咲き誇っていた。今年はずいぶん開花が遅かった。この時期はいつもなら園庭が桃色のじゅうたんになるけれど、今日はまだ土の色が前面に出ている。

朝：隣の住人は二人で暮らし始めた模様。雨戸は園についたときには既に開いていた。９時ごろ、洗濯物を干しに女が庭に現れる。

あの女が一体何者なのかわからない。年は男とはちょっと離れているように見える。…兄妹？
にしては顔が似ていない。そういえば、「さん」づけでお互いを呼ぶ声も聞いた。やっぱり縁故じゃないだろう。じゃあ、なに？　秘密結社？　え、やっぱり地獄博士とナラーシャ？

＊

「ダメなやつがなぜダメか、それを考えるのも悪役を観る醍醐味なんだぜ」
風季（ふき）は一度クマのキャラクターの付いたボールペンを置いてビーズのクッションに身を埋めた。いつも通り、手帳に日記を書きこむ。夜は長い。幼稚園は終わるのが早いけれど、給料も少ないからこうして一人、部屋でおやつを食べながら過ごすぐらいしかできないのだ。友達に会うこともなく、ネットもやらずに（そもそも契約すらしていない）、静かに部屋で明日がやってくるのを待つ。風季の毎日は、そうした繰り返しで成り立っていた。
風季の部屋は、一つ一つの小物はレースだったりストライプだったり、かわいらしい物ばかりがあふれていた。しかし、どことなく殺風景な雰囲気が否めなかった。全体として部屋をどうしたいのかがわからない。そのため、どの小物もまるで仮住まいに身を寄せる居候になるしかなかった。肩身を狭くして、互いの視線を気にしながら、何も主張すまいと縮こまっている。
壁には何枚もの写真が楽しげに飾られていた。幼稚園の先生同士の飲み会だったり、卒業した園児だったり、高校の友達と遊びに行った写真だったりと、シチュエーションはさまざまだったが、そのどれにも風季自身は写っていなかった。
「そういうダメなところって自分のなかにもあるんだ。な？　悪役のほうが親近感沸くだろ？」
風季はぼんやりと続ける。地獄博士とナラーシャは風季のよく知る特撮に出てくる登場人物だった。地獄博士は死んだ妹・ナラーシャを蘇らせるために悪の秘密結社に入隊する。しかし、地獄博士はやがて妹を蘇らせることよりも秘密結社の活動そのものに没頭していく。忘れ去られた妹は冷たいショーケースの中で氷漬けの時を刻む。
風季は食べかけだったモンテールのシュークリームを再び口に運んだ。三段になったサイドテーブルの一段目と二段目には化粧品の瓶があれこれ並んでいた。そして、その一番下の段には化粧品のファンシーな色とは不釣合の黒地の本が一冊立てかけられていた。
『特撮・アニメ　悪役大全集』
何度も読まれているものらしく、背表紙はいたみ、ページは元々の凛とした直方体の形から大きくはみ出てだらしなく開き気味になっていた。
「いつになったら本返せるんだよ」

風季はいつのまにかシュークリームを食べるのを止めて、その本の主がそこにいるかのように、じっと黒い背表紙を睨みつけていた。

＊

「あのねぇ、三〇年もカメラほっといたら壊れるうんぬんの前にまず電源。電池の液漏れなのよ。これのせいでカメラが動かなくなっちゃってるの」
「はぁ、そうでしたか」
「これ全部きれいにしておきましたから。でね、カメラの電源なんだけどMR44。これね、もう生産されてない電池なのよ。だけどね、LR44って電池が代わりに使えますから。これ使って頂戴ね」
「はぁ、そうでしたか」
「大丈夫？　覚えた？　書いとこうか？」
「はぁ、そうでしたか」
「そうでしたか、じゃないでしょうに」
「難しいわねぇ、本当に」
　カメラ屋の店主はしょうがないな、という顔をして眉をしかめると、ボールペンの頭をカチリと小突いた。明細の肩のあたりに「電池はLR44を使ってください」と書き込む。
「ありがとうございます」
　房子はにこりと微笑んでそれを受け取った。やれやれといった感じで、店主は鼻から息を吐き出した。
「でもね、これ値段の割には結構いいカメラよ。レンズがねＨＥＸＡＮＯＮっていういいレンズ使ってるんですよ。だからよく写ると思います」
　房子は今度は何も言わずにニコニコ笑っておくだけにした。
「そうだ、あとこれ」
　店主は、カウンター下の棚から縦長の口の開いた封筒を取り出した。
「カメラの中に、フィルム残ってたんで、現像しておきましたよ。すでに感光しちゃっててダメになってたものもあるんで、これはサービスで」
「ありがとうございます」
　房子はうやうやしくお辞儀をし、顔を上げると、カメラ屋の店主の視線とぶつかった。店主はばつが悪そうに横を向いた。いやいや、すみません。それでは、カメラ大事に使ってやってくださいね。
　店主が最後の言葉をかけたときには、もう既に写真店のドアベルがリン、と音を立てていた。

＊

　写真店を出ると、房子の足取りは一歩あゆむごとに早くなっていった。房子の後ろを、目に見

えない亡霊がとぐろを巻いてどんどん大きくなりながらついてきているかのような様子だった。亡霊は房子が振り返るのを鎌首をもたげながら待っているのだ。房子が振り返ったら最後、亡霊は巨大な鎌の房子の首に振り落すのだろう。
　房子は、しまいには小走りになっていた。人のいないほう、声のしないほうへ。房子はまだ慣れない街のなかをでたらめに足を向けた。やがて、住宅街の中に入ったが、それでも房子の足は止まらなかった。房子が足を止めたのは、亡霊の影が去って安心したからではなく、風が吹いて、目の前が散りゆく桜の花びらでいっぱいになったからだった。
　房子は声もなく桜を見上げた。無音だった。桜の大樹は幾重にも花をつけた枝を重ね、そこに立っていた。また風が吹く。房子の銀色の髪の上に花びらが一つ二つ舞い落ちた。
「邪魔だよ、どきな」
　突然、房子は老婦人に肘で体を押された。房子は、反射的にすみません、と謝って、自分が立ち止まっていた場所を確かめようと、あたりを見回した。
　房子が立ち止まったのは、公園の入り口だった。入り口は大きく開かれており、房子が立っていた場所も人の進路を妨げるような場所ではなかった。一歩右か左にずれればいくらでも前に進める。
　むっとした房子は、声の主のほうを見た。その人物は、つばの広い大きな帽子をかぶり、派手な模様入りのコートを着て、そう早くない速度で前方を歩いていた。服や小物のデザインは流行に左右されないトラディッショナルなものばかりで、どれもいい値段がしそうだった。しかし、帽子はよれよれでつばが下に垂れていたし、コートの柄は元がどんな色だったのか見当がつかない程褪せていた。その服の様子だけ見ると、浮浪者のようにも見えた。そして、手には白い杖が握られていた。
　房子がその老婦人を見ていると、老婦人は何かを思い出したようにぴたりと止まった。そして、房子のほうを振り返ってじいっと見つめた。房子はまた何か声をかけられる前に、慌ててその場を立ち去った。

　＊

　笹岡は真っ白なキャビネットの鍵を開けた。ぽっかりと物静かな獣が口を開き、胃袋の中に蓄えられたファイルをずらりと示した。ファイルはどれも背幅が５センチはある分厚いもので、その中には隙間なくぎっちりと書類が挟まれていた。随分と期間の幅はあるようで、下のほうの段にあるものは紐綴じのファイルや、背表紙に書きこまれた万年筆のタイトルが色あせているものもあった。
　笹岡は、中段にある新しい白いファイルを開く。何枚かページをめくると、房子が紙上に現れた。頬は強張り、眉間には皺が寄っていた。そして口元はなにかを見つけてしまったかのようにわずかに緩んでいた。今ののびのびした表情からは想像もつかない。これでは指名手配の犯人の写真だ。
　笹岡はもう一枚ページをめくった。きれいにプリントアウトされた文字から一変、殴り書きの

メモが続く。それは笹岡が残した面談記録だった。

２０ＸＸ年　１１月１５日　窪池房子さま　第一回ご面談

「もう少し、具体的な条件をお聞かせ願えませんか。私も窪池様にもっともふさわしい相手を探したいと考えていますので」
窓からの日差しは、部屋に長い影を壁のほうまで伸ばしていた。笹岡は、穏やかな口調で言っていたが、内心、小さな苛立ちがぐつぐつと煮詰まり始めていた。湯飲み茶碗は既に茶葉が乾燥してすっと真っ直ぐな線が引かれている。ずっと続いた沈黙の後で、房子はようやく答えた。
「なんでもいいんです、一緒に暮らしてさえくれれば」
笹岡は笑顔を作るついでに息を吐いた。
「そうですか…それでは、せめてこの『過去の印象的な思い出』の欄に小学校のときのことばかりでなくて、もう少し上の…そうですね、二〇代から五〇代ぐらいの間に起きたことを何か一つくらい書いて頂けないでしょうか。結婚というのはお一人でするものではなく、お相手あってのことですから。こういった情報がお相手にとって良いパートナーを探す手がかりになるんですよ」
房子はじっと紙面を見つめた。先生にテストの悪い点を怒られた生徒のように、そのままじっとしている。
このときの房子は、何に対しても受け身だった。自分で何かを選ぶことができなかった。蛇行する川の流れに任せるままで、氾濫したら氾濫しっぱなし。治水工事をしてなんとかうまく流れるようにしてやろう、などとは決して考えないタイプの人間だった。
しかし、人は変わるのだ。それから数週間後、健二に出会ってから房子はみるみる変わっていった。声を立てて笑うようになり、控えめな声で会話に合いの手を入れるようになり、あれがしたいこれがしたいとわがままを言うようになった。
笹岡はペンを手に取った。万年筆のインクが桃色のメッセージカードの上をすべっていく。それは笹岡からの二人への結婚祝の手紙だった。窓からの風でカーテンが揺れる。相談所から見える桜は葉が芽吹き始めていた。笹岡は最後の署名を済ませ、封筒に封をするとにんまりと笑った。その笑顔は以前よりもほんの少し不自然でなくなっていた。
突然、携帯電話の着信音が響いた。バッハの「主よ人の望みの喜びよ」のメロディが軽やかに流れる。そのまま天へと昇っていけるような心地よいメロディだ。笹岡は電話を取った。
「はい、笹岡葬祭店です」
笹岡は隠れるように奥の部屋へと進んでいった。リビングはさっき封をしたばかりの封筒が置いてけぼりになった。風を受けて、カーテンが大きく膨らんだ。部屋の奥から笹岡の厳粛な声がする。
「お悔み申し上げます。すぐに伺いますのでご住所を教えて頂けますでしょうか」

（第四話へ）

第四話

　グレーのスーツの集団が足早に黄色の電車に上がり込む。風季もうつむき加減でその集団の動きに歩調を合わせる。車内の人間は眼だけを動かして、入ってくる者の数を見定める。風季はそれらの眼と眼を合わせないようにして、ホームと開いたドアの境界に足を掛けた。猛る猪が迫る勢いで背中を押される。しかし、風季は眉をしかめもせず、甘んじた。
　幼稚園までは行こうと思えば自転車でも行ける。風季が電車に乗るのはいつもたったの一駅分だ。しかし、風季はそれをしなかった。
　満員電車の中での風季の表情は穏やかだった。節電の為に蛍光灯を切られているせいで、車内の中央付近は薄暗く、貨物列車のようだった。人の頭と頭の隙間から、ときおり燦々と窓に光が差し込んだ。それは車内にいっそう影のコントラストをもたらした。光に溢れている外の世界が地球の反対側の景色のごとく車窓を通り抜けていく。
　改札を抜け、階段を下りると、人々はめいめいの場所に足を向けていった。風季は横断歩道を渡ったところにある大きな神社の境内を通り抜ける。この神社を抜けると、風季の通う幼稚園だ。白く塗られた北欧風の門の先で、奔放に植えられた園庭の花々が風季を出迎える。風季はその花をしばし眺めた。なだらかな丘の斜面に植えられた花々には、庭と花壇を区切る境が存在しなかった。花が密集する丘の一番上から、徐々にその密度は薄くなり、やがて園庭へと繋がる。花は人と生きる領域を明確に区切られることなく思い思いの場所で咲いていた。
　風季はその丘の上のほうでパンクロッカーのピンクに染めた髪のような細いひなげしの花びらが"Hey now!"と空を仰いでいるのをみつけて、リズムに合わせて足を進めた。
　園舎に入って左側、職員専用のゾーンに進むと、風季は先客とすれ違った。
「おはようございます」
　優等生的なきびきびとした声が飛び込んでくる。生成り色のエプロンをつけたひょろりと細長い女性職員だった。天然パーマのうねった髪を後ろで一つに束ね、胸に『とごし』という名札をつけていた。
「おはよう」
　風季はもうこれで一日の仕事がすべて終わったような疲れた口ぶりで返す。カバンを投げるように置き、上着をハンガーにかけ、ロッカーから代わりにエプロンを取り出す。汚れてもいい園内着に素早く着替え、仕上げにクリーム色のエプロンの紐をきゅっと締めた。ロッカーの鏡の前で、風季はいいっーと笑ってみせる。
　更衣室を出ると、園児が一人風季の姿を見つけて走ってきた。風季はしゃがんで園児を抱き止める。園児は風季の腕の中できゃっきゃっと小猿になった。風季は目を細め、さっきの低空飛行の声が嘘のように甲高い声をあげた。
「わたるくん、おはよう！　今日、来るの早いね！」
　はにかんだ顔で園児はうん、とうなずき、風季は笑いながら園児の頭をもしゃもしゃと撫で回した。柱の影から保護者が顔を出した。すみません、早く幼稚園行くって聞かなくて。風季は園児を下すとにこやかに保護者に返答した。風季のその口調は手慣れたもので、保護者もそんな風

季に信頼を抱いていることがその一回一回の相槌の重さから図り知れた。戸越は風季の様子を横目で見遣ったが、その変容ぶりは見慣れたものだったので、先ほどの変身前の風季の姿はロッカーの隅のところでだんまりを決めてしまわれることになる。
　帰り際、風季が再びそのロッカーの扉を開くとき、風季だけがその抜け殻の姿と顔を合わせることになるのだ。

　＊

４月１９日

　朝、１０：３０頃、縁側でお茶。湯飲みは白地に青で絵が描かれている、口が広いタイプの物。ペア。
　お茶を持ってきたのは女。
　しばらくの間、お互い湯飲みをのぞくばっかりで飲もうとしない。
　なにしてるんだろう？
　中に毒でも入ってて、これから心中しようとしている、とか？
　だけど怖くて、飲むのをためらっている、とか？
　でも、お茶を飲んでも、二人とも苦しむ様子なし。

　＊

「煎れてみましたよ」
　房子はお盆の上に二つの湯飲みを乗せて現れた。縁側で日に当たっていた健二は振り向いて、笑顔で房子を受け入れた。お盆が縁側に置かれると、二人はお盆の上の湯飲みをじっとみつめた。
　湯飲みの中には、ボール状になった緑の繊維質のものが浮いている。小さな毛糸玉のようだ。二人とも、言葉もなくそれを見つめている。
「房子さん、ほら、開いてきましたよ」
　毛糸玉の外側が少しずつほぐれてきた。花が開花していくときのように、折り重なった繊維質のものがゆっくりと外へと放射状に広がっていく。その、緑の繊維の奥から紅色のものがのぞいた。更に広がっていくと、それは葉の中に隠されていた花だった。葉に同じく針のように細い花びらだ。一片一片の花びらを広げ、湯飲みの中に恒星の輝きを放っている。
「きれいね」
「ジャスミンティー、初めてでしたか」
　縁側にはジャスミンティーの高貴な香りが立ち上っている。房子は湯飲みを手に取って香りを楽しんだ。
「知らないまま死ぬところだったわ」

「今度はサイフォンコーヒーを煎れてあげましょう」
「裁縫コーヒー？　縫う目でもあるの？」
「サイフォンコーヒーは火を当てながら煎れるから温めはないですよ」
　房子は染物の工房で日を当てて布を乾かす工程で煎れられる裁縫コーヒーなるものを夢想していた。工房のベランダには何枚もの藍染の反物が太陽の光を浴びながらはためいている。きっと染物が有名な地方で煎れられるコーヒーなんだわ。でも、縫い目もないのになんで裁縫？

　＊

　１６：００頃、部屋の中が騒がしい。ついに事件か。
　と、思ったら、二人とも縁側にも出てくる。じゃれながら写真を撮りあっている。
　ただの仲良し老人だろ、これ。
　でも、なにかのアリバイを残そうとしているのかも。油断できない。
　一人残された男のほう、執拗に桜の木の下を撮る。もう桜散ったのに。怪しい。
　再び、女が縁側に出てくる。男が女にカメラを渡して、また桜の木のところを、今度は自分と桜という図で撮っている。怪しい。この木の下絶対なんかある。
　死体だ。きっと死体が埋まってるんだ。

「田邊先生、最近毎日なに一生懸命書いてるんですか？」
　バタンと音を立てて、風季は手帳を閉じた。振り返ると戸越がつくしのように立っていた。目の端に映ったものを思い出しているのか、ゆっくり首を傾げながら風季に訊ねる。
「…もしかしてレコーディングなんとかってやつですか？」
　風季は曖昧に笑った。
「まぁ、そんなようなものかな」
「なにごとも継続、ですよねぇ。私はなかなか続かなくって」
　戸越はとろん、とした口調で言った。てめえはレコーディングなんちゃらやる必要ねえだろうが、と心の中で毒づきながら風季は、
「新しいこと始めてみるのもいいもんよぉー！　ほら、なんせ春だしぃ」
と、高いテンションでころころ表情を変えながら言った。
　今度は戸越が、少し疲れたように笑って、風季の側を離れた。
「そうですね、変わるにはいい時かもしれませんね」
　園庭を眺める戸越は、どこを見ているのかよくわからなかった。園庭には、園児は誰一人として出ていなかった。風季は見えていなかった水たまりに自分一人がはまってしまったような気持ちになった。ばっしゃん。
「ねえ、戸越先生は、あのゴミ屋敷のじいさんち、なんで突然きれいになったんだと思う？」
　風季は聞いてしまってから後悔した。なにを聞いてんだろう。その答えを聞いたら、自分がもっとずぶ濡れになってしまうとわかっているのに。

「…一人で死ぬの、嫌だな、って。思ったんじゃないですかね」
　軒の下には幾つものモビールが飾られている。赤やオレンジの色紙を複雑に組み合わせて作られた太陽のようなもの、青やエメラルドグリーンの色紙で作られた球形のもの。どれも音もなく揺れて、刻々と見せる姿を変えている。風季はすっかり陽の落ちた、幼稚園の暗い室内に一人で立っていた。いつのまにか、戸越もいない。どれくらいの間、風季はこうしてぼんやりしていたのだろう。風季は時間がたがを外し、めちゃくちゃに進んでいるのではないかと考えた。しかし、鞄のなかでは携帯の着信ランプが点滅していて、時刻が確かに経過しているのがわかった。
　紫の着信ランプ。姉の涼香からのメールだ。風季は携帯を鞄の奥に押し込んだ。涼香からのメール――それは今、風季がもっとも見たくないものだった。風季は逃げるように幼稚園を退出した。

　＊

「じゃあ、今度は縁側に出てみましょう。ああ、そこ。そこに掛けてみてください」
　修理の終わったカメラを手に、健二はいつもの1.3倍の速度で動いている。そのカメラをかつて手にしていた頃の記憶を体現しているみたいに。
　房子はちょっと恥ずかしそうにしながら、遠慮がちにカメラのレンズのほうを見た。その瞬間をシャッター音がすかさず捕える。今にも止まりそうなフィルムを巻き上げる機械音が鳴り、やがて静かな風景に戻る。
「まだ撮るの？　もういいでしょう。そろそろお買い物もしないと」
　房子は頬を染めながら、家の中へいそいそと引っ込んでいった。
「…逃げられてしまいましたなぁ」
　健二はひとり庭に残されると、そう言って頭を掻いた。
　背後の花の散った桜の木が風に揺れた。健二は桜の木を見上げた。初めて見るかのようなまなざしだった。健二はカメラを構え、上を見上げながら一枚シャッターを切った。フィルムの巻き上げ音が止むのを待っていたかのように風が吹き、辺りは騒がしくなった。
　健二は、今度は桜の木の幹の辺りに標準を合わせ、シャッターを切った。何枚も何枚も切った。騒がしい葉の擦れる音に、シャッター音はかき消された。それでもシャッターボタンを押し続けた。
　十枚ほどそうやってシャッターを切ると、健二はやっとファインダーから顔を離した。力なく、縁側に腰掛け、ぼんやりと桜の木を見上げた。そのとき、からからと乾いた音を立てて、縁側の窓が開いた。
「それじゃあ健二さん。私、お買い物に行ってきますよ」
　と、房子が窓から顔をのぞかせる。
「ああ、そうですか。お願いします」
　健二は房子のほうを振り返った。その表情に房子は驚いた。それは、今まで房子が目にしたことのない健二の表情だった。目から輝きは失われ、頬骨が力なく沈み、口元は溺れた人のように

力なかった。親に捨てられた子犬を必死に町中探している小学生がちょうどこんな顔をするのではなかろうか。
　房子は買い物用の袋を置いて、縁側のつっかけで健二の元に歩み寄った。
「房子さん」
　健二は首に掛けたカメラを取ると、房子にそれを手渡した。
「一枚、撮ってもらえませんかね」
　そういうと、健二は桜の木の下にゆっくりと歩いて行った。そして、桜の木の下のところでくるりと振り返り、背筋を伸ばした。
　房子はいぶかしがりながらカメラをおもむろに構えた。そして、ファインダーを覗いた瞬間に、何かに気付いたようにはっとした。
「さあ、いいですよ」
　健二は凛とした声を出し、房子を促した。
「いいですか、じゃあ撮りますよ」
　房子は宝箱の蓋を丁寧に閉めるように、シャッターを切った。

＊

　午前中ともなれば、幼稚園で遊ぶ子供たちの声で居間は賑やかになる。障子から漏れる淡い光が、畳の藺草の匂いを温めた。室内は外の賑やかさと反して静かだった。
　房子は箪笥の引き出しから、細かい罫の印刷された封筒を取り出した。それは、この前写真店で渡された封筒だった。
　静かに、音を立てないようにして、中身を取り出す。
　まず出てきたのはネガフィルムだった。半透明の帯状の袋が下へと連なり、じゃばらに畳まれていた。半分は感光してしまったのか、何も映らず真っ白になっている。房子はそれを脇にやり、更に奥に手を伸ばした。次に現れたのは、細長い、広告の印刷された封筒だ。中を開けると、写真が束になって収まっていた。――壊れたカメラに収められていた写真だ。
　健二は区役所に行っていて、しばらく帰ってこない。房子は写真を一枚一枚手で繰った。
　写真に写っていたのは、ほとんどが小学校の卒業式の写真だった。健二と口元が似ている少年が卒業証書を受け取り、演台から下りていく写真。連なるパイプ椅子のなかで、他の小学生の頭に埋もれながら、カメラのほうを見ている顔が半分くらい映った写真。小学校の門の前で、着物を着た女性とさっきの少年が並んで写っている写真。家に戻って、卒業証書を誇らしく前に広げる少年と、その横でまったく関係ないポーズをとっているおさげ髪の女の子（この少女の眼もとは、さっきの着物の女性と似ている）。そして、桜の木の下で、まだふくよかに肉付き、背筋もまっすぐ伸びている健二と、さっきの少年と少女、着物を着た女性が、カメラのほうを真っ直ぐに見て並んでいる――家族の写真。
　写真に写っている桜は、きっと庭にあるあの桜だろう。まだ幹が今ほど太くなっていないが、枝振りが同じだし、背景の塀も一致している。卒業式に限らず、あの桜の下は健二の家族の節目

節目を刻む大切な場所だったはずだ。この写真が撮影されたときには四人の家族がこの家で生活を営んでいたのに、いまここにいる写真の中の人物は健二だけだ。
　房子は、この写真を写真店から受け取った後、帰り際に寄った公園のなかでこの写真に目を通していた。健二には健二が生きてきた七〇年余りの歳月がある。房子は、そのほとんどの場面に居合わせることができなかった。それは当たり前のことであるのだが、目の当たりにすると辛いものだった。
　二度と写真を目にしないところに置く、それも一つの手段だっただろう。しかし、房子は再び紐を解いた。その写真が自分に馴染んでくるのを待つように、一枚一枚両手にとっては眺めた。
　写真は、長く現像に出されていなかったために、どれも色が赤くぼやけていた。しかし、そこから浮かび上がったひと型の像は妙になまなましく、生きている息遣いが聞こえてきそうだった。
「こんにちは」
　房子は写真の中の着物の女性に話しかけた。健二の妻であった人の顔は、若かった頃の房子と比べても似ても似つかなかった。派手ではないけれど整った目鼻立ち、謙虚さと自信が程よく混在している出で立ち。きっとおしゃべりで、よく笑う人だろう。写真店の主人がまじまじと房子の顔を眺めたのも無理もない。この老女は後妻なのか、それとも月日はかくも人を変えるものなのか。
　どうして今日という日がくるまで、この写真が現像されてこなかったのか。その理由らしきものを房子は笹岡から聞いていた。そしてその後、健二の口からも聞いていた。
　笹岡の言い分と、健二の叙述は微妙に食い違っていた。それは観察者と当事者の立場の違いからもたらせるものだったのだろうか。
　どちらがより事実らしいか。それを房子は関係ないことだと思っていた。健二の言ったことが、房子にとっての真実だ。房子は健二の人生を自分の人生の一部にすると決めたのだから。
　しかし、その逆はどうなのだろう。
　健二もまた、笹岡から房子の人生を聞いているはずだ。でも、房子自身の口から健二に話したことはまだない。健二はあの生い立ちと、今の房子を見て何を思ったのか。房子は、健二に訊くことができなかった。
「あなたが黙っていても、私は責務として、あなたの生い立ちはすべて調べ、先方に伝えます。そうでなければ、公平ではありませんから」
　房子はそう言った笹岡の言葉を思い出していた。少し息巻いたあのときの口調で、老けてるようにも見えた笹岡が、実はまだそう歳はとっていないことを房子は直観した。しかし笹岡さんは、いったいどこまで調べ上げて、なにを健二さんに伝えたのだろう？
　柱時計が一度鳴った。十一時半だ。房子は立ち上がった。一日が山を越す前に、昼食の準備に取り掛からなければ。手早く写真を片付けて、箪笥にしまう。
（どの道、私にあるのは今だけだ）
　房子は頭の中でそうつぶやいて台所に出た。鍋に水を入れ、湯を沸かす。
（健二さんが知っていようと、いまいと、私にあるのは今だけだ。今、私が目の前にあるものを

信じられなかったら――）
　房子は青いガスの炎をうつろな目で見つめた。
（こうして生きている意味だって、私にはないんだから）

（第五話へ）

奥付

ゆく河の舟で三三九度

http://p.booklog.jp/book/25860

著者：深森花苑
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kaenfukamori/profile

この作品はフィクションであり、実在の人物、団体とは一切関係ありません。

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/25860

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/25860